

意義

○乳幼児期の子どもにとって、絵本を読んでもらったり、おはなしを聞いたりすることは、ことばを覚えたり、興味・関心を広げたりする大切な機会であり、子どもの「読み解く力」を育む基礎となるものでもある。国の調査研究では、親が「小さい頃、絵本の読み聞かせをした」など文字に親しむよう促すことと学力の関連性も指摘されており、全国的に子どもの読書離れの傾向が見られる中、就学前からの家庭における読書習慣の形成が大変重要である。

現状・課題

- 県内各市町では、公共図書館でのお話し会や乳幼児健診時に読書ボランティア団体等と連携し、ブックスタート事業等の取組を推進している。一方、就学前の保護者を対象とした民間企業のアンケートでは、家庭で絵本や本の読み聞かせをしている者の割合は、年齢が進むにつれ減少傾向が見られ、特に幼児期後半から就学前までの興味・関心の低い家庭も含めた、継続的な啓発の機会が必要である。
- 家庭教育に協力する「しがふぁみ」企業・事業所、県内読み聞かせボランティアの熱心な活動が展開されており、民間活力・ネットワークの活用促進が必要である。
- コロナ禍により体験的な活動が少なくなるなど人間関係を築くための機会が少なくなる中、家庭教育の一環として家庭での読み聞かせの重要性は高まっており、アウトリーチによる「おうちで読書」の取組は引き続き実施していく必要がある。

方針

○家庭で読書の習慣を身に付け、発達段階に応じた読書活動をととして親子の思いを伝え合い、コミュニケーションを図る「おうちで読書」の取組を、主に幼児期～就学前の親子が集まる市町・企業等のイベント等を活用してコロナ禍でも実施可能なアウトリーチ型の啓発活動を県内各地で広く展開する。



実践



- ・次代を担う子どもたちの育成
- ・絵本をととした親子のコミュニケーション

読み解く力を育む基礎

- ・情緒的発達、想像力、言語能力を刺激
- ・家庭における読書習慣の定着

コトバが育つ



ココロが育つ

おうちで読書